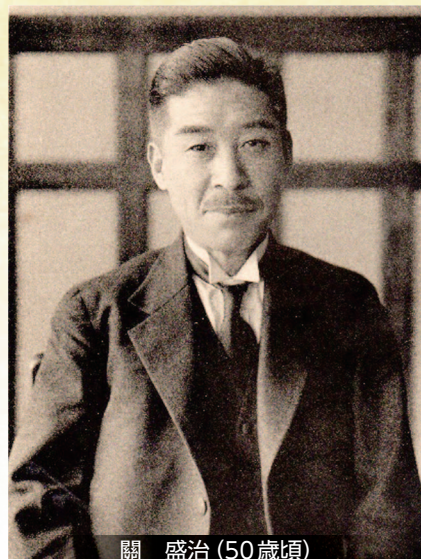


“熱誠人の生涯”

初代校長 せき もりはる 關 盛治が 遺したものの

1878(明治11)年生～1933(昭和8)年没



關 盛治(50歳頃)

福井工業大学教授 市川 秀和

(建築専攻H5年修了・システム設計専攻H8年修了)

福井大学工学部の源流となった福井高等工業学校は、大正12(1923)年12月10日付の文部省勅令を以て創設され、その翌日に關盛治が初代校長を拝命した。このとき45歳の關は、持病の慢性腎臓炎により数年前に主治医から余命2年の宣告を受けながらも回復して持ち堪えつつ、生涯最期の仕事と密かに覚悟して校長職に臨んだものと思われる。そして「教育は熱なり、愛なり、感化なり」の深い教育信念をもつ關は、学生と教職員を温かく誠実に厳しく先導するとともに、「北冥」(莊子)の言葉に象徴される悠遠の志に向かう「学風」の創造に日々尽力したことで知られ、その生き方は「熱誠人」と称讃され、後々語り継がれてきた。しかしながら關本人がどのような生涯を過ごしたのか、これまで詳しく紹介されていない。そこで遺稿集『工業教育一家言』から、その生涯の軌跡を紹介する。なお、以下の本文では、遺稿集のページを示す。

① 信州松本から仙台、東京へ

關盛治は、明治11(1878)年2月25日に雪深い信州の城下町・松本にて、下級士族・關繁連の二男として生まれた。幼年期の極貧生活で「奉公」(47P)しながら勉学の志を持ち続けた關は、小学校卒業後、

周囲の援助により名門・松本中学校へ無試験入学の推薦を受けたものの、初代校長・小林有也に自ら懇願して断り、敢えて「学僕」(14P)の立場を選んだ。教室の一隅で授業を必死に受け、放課後は同級生の帰宅を見送りながら、ただ独りで夕暮れの校内の清掃や用務等を積極的にやり遂げる生活をひたすら続けた。故に当中学には、關の学籍も卒業証書もない。

こうして苦学する關をその後も援助してくれる温かい人たちの働きかけがあり、關は「専検」を利用したと思われるが、明治29年に東北仙台の第二高等学校へ進学することになる。「貧困と戦い、色々苦しい境遇を経て来た」が、「一日も早く此の苦しみから両親を救い出したいという念が私の頭から寸時も離れませんでした」(15P)と關は、後年しみじみと回想している。

なお關家は、貧しいながらも学問や教育に寛容な家柄であったそうである。關盛治の甥・關博雄(1910～1990)は東京工業大学機械科を卒業後、王子製紙株式会社へ入社し、技術者として活躍後に副社長となる。その没後に現在の関記念財団が設立され、日本の科学技術・人文科学等の幅広い学術研究に多大な貢献を今日まで行っていることが知られる。

さて故郷の信州を遠く離れ、同じ雪国東北の杜の

都・仙台において学生生活を過ごす中で關は、これまでの過酷な生活苦の影響であろうか、左の腎臓を抉出する大手術を受けるに至り、その後も残りの腎臓が度々炎症を起こして苦痛の日々に悩まされ続けることになる(49P)。ただ生涯の友・佐野利器との出会いがあった。卒業後、共に東京帝国大学に進学するが、關は機械工学、佐野は建築学へそれぞれの道を歩み出した。この帝大時代についての詳細は現在のところ不明であるが、在学中に3歳上の戸城やす(福島出身)と結婚し、のちに4人(2男2女)の子どもに恵まれることになる。そして明治36(1903)年に東京帝国大学工学部機械科を卒業した。

2 豊田佐吉との出会い、そして欧州留学・受洗へ

大学を卒えた25歳の關は、九州鉄道に技師として就職したものの、自ら独自に研究を開始して最新の外国文献を参照しながら1年半ほどで纏めた成果が、明治38(1905)年出版の単著『水力機械学』であり、広く好評を得た。これが機縁となったのであろうか、名古屋の豊田商会に転職した。当社は、現在のトヨタグループの創業者・豊田佐吉が織物業の近代化を目指して「自動織機」の本格的な技術開発のため明治35年に設立したもので、この創成期に豊田の天才的な開発事業において關は大いに活躍することになる。關はライフワークとなる「機械」と「繊維」の实地研究に従事するとともに、10歳上の豊田佐吉の生き方に強く感化され、自己の理想とする人間像を生き活きと見て取り、後年に「熱誠人」と呼び親しみ、生涯にわたって讃仰した(75P)。

こうして關の有能な研究力と豊田商会での技術力などが周知されたことに拠ると思われるが、明治38年に新設されたばかりの名古屋高等工業学校の土井助三郎校長より機織科の講師に招聘され、工業教育の教壇に立つことになり、機械と繊維に関する講義と実習を担当した。この当時の若い關が育てた愛弟子・吉田喜一は、のちに福井高等工業学校・講師となるが、ふたりの師弟関係を物語る貴重な共著が現在遺されている。

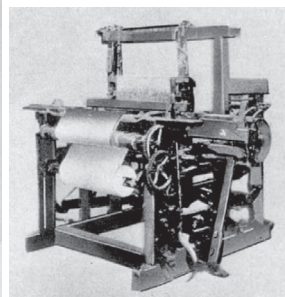
名古屋高等工業学校は、織機科と色染科のほか、建築科と土木科の全4科を有した高等工業教育機関・最初期のモデル校であり、ここで教育者として



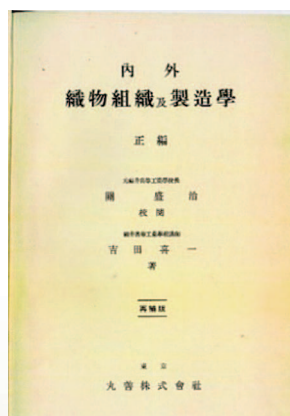
佐野利器(1880～1956)は、大学院に進学して我が国の建築耐震工学の基礎をつくり、のちに東京帝国大学教授となった。さらに日本大学工学部を創設するなど工学教育の普及と充実に尽力したことで知られる。



關 盛治著『水力機械学』
博文館
(明治38年)



豊田佐吉(1867～1930)と「豊田式自動織機」



關盛治校閲 吉田喜一著
『内外織物組織及製造学
正編』
丸善株式会社 大正7年
(再補版・昭和13年)

スタートした關にとって、かかる学校環境での教育経験が、のちに自らが創設する福井での学校づくりに活かされたと考えられる。

このような關の技術者・研究教育者としての活動実績が高く評価され、明治41年から文部省研究生として、ヨーロッパ近代織物業の現地視察を主な目的に約2年間の欧州留学へ旅立った。イギリス・マンチェスターを活動拠点に選んだ關は、ロンドンの近郊都市アクトンに建つセント・マリア教会・牧師館で1年半を滞在しつつ、イギリスの主要な織物工場と企業経営などを詳しく視察するとともに、フランスやドイツなどへ視察旅行に積極的に出向いた(13P)。そのほか留学中で特筆すべきは、長期滞在した教会にて關が「洗礼」を受けたことである。異国の土地で暮らしながら自己を見つめ直した關は、人間が誠実に生きる上での「信仰」の大切さに気づいたという。のちに福井高等工業学校の開校直後、關校長の人柄に魅かれて集まった学生たちによる「基督教青年会」発会式にて關は、次のように語った。

人間である以上いろいろな誘惑に煩わされ、時には失望する、悲嘆にくれる、或は厭世に陥入るといふ様な事が絶えずある。其の間に立って正しき道に己を引き戻すという事は実に難しい事で非常に強い意志の力が要るのであります。元来人には皆良心があります。自己の良心が命ずる儘に行動することの出来る人が一番偉く、又一番仕合せであると思います。今仮りに人間の頭脳の中に良心という塊があるとす、その塊の後に一つの幕が下っていて其の蔭にこの幕を引張り上げる力が潜んでいる。その力が所謂良心を使ってゆくのでありますから、此の幕を上げて十分にその威力を発揮せしめねばなりません。此力は即ち信仰であると私は考えた、これが私の信仰の途に入り度いと思った動機であります(15～17P)。

苦学を重ね堪え続け、他者の温もりに支えられて独り生きてきた關が、常に戦ってきた自己の弱さと無力さを克服するためには「強い意志の力」だけでは限界があることを痛切に知るに至り、これを本当

に補うには「良心」と、その良心を内面深くから引っ張り上げて発揮せしめる「信仰」の力を願い求めた上での「洗礼」であったのである。この後、熱誠人と称讃され敬愛される關盛治に、人間として生きる喜び以上に、こうした苦しみと悲しみに日々向き合ってきた純粹で強靱な姿勢と尊い矜持を、今のわれわれは心に受け止めねばならないと思う。

③ 米澤・桐生・京都を経て、福井の地へ

およそ2年近くに及んだヨーロッパ留学経験にて、近代織物業に関する最新の現地事情を習得するとともに、自己の生きる境涯を深めた關が、明治43年に帰国して向かった着任地は、伝統的な機業地として有名な山形県米澤市であり、同年10月に開校したばかりの米澤高等工業学校・紡織科に翌44年に赴任した。同校の基礎づくりに5年間にわたって尽力した後、次も織物の伝統ある群馬県桐生市に開校したばかりの桐生高等染織学校へ大正6年に移って工業教育の環境整備等に関わり、大正9年に桐生高等工業学校への移行を見届けた關は、持病の慢性腎臓炎が再発したこともあって、いったん教育界を離れて実業界へ復帰しようと京都西陣の壽製作所・技師長兼取締役へ転職し、現場の技術者として挑んだものと思われる。記録によると、壽製作所の新工場の設計や最新機械の選定等の陣頭指揮に立って竣工させたのであった。

こうして日本の伝統的な織物業を代表する米澤・桐生・京都において多大な実績をつくり上げた關盛治に対して当時の文部省が、明治以降の新興機業地である福井の地に「繊維」と「機械」の高等工業学校を新設するに当たり、その校長就任を要請したのは、かかる關の経歴を高く重んじた結果であったと考えてよい。冒頭で触れたとおり、持病で苦しむ45歳の關は、これまでの知識と経験を全て投げ込んで生涯最期の責務を果たす覚悟で引き受けたのではなかろうか。なお大正後期から昭和初期にかけて全国的に「羽二重」から「人絹」への転換期であり、地元福井の織物業界は、高等工業学校の新設と關校長の着任に多大な期待を寄せていたであろう。

大正12年12月に校長を拝命した關は、半年もない翌年4月の開校に向けて直ぐに準備に着手した。

まず文部省の設置予定3科「色染科・紡織科・機械科」に異議を申し入れて「建築科」の増設を強く要望した關の言動は、それまでの技術者・教育者として培った多くの経験に基づく理想の学校づくりを目指した強い信念に拠る他ないが、これは当時も今も極めて異常であると言わなければならない(2P)。なお關の要望の背景には、名古屋高等工業学校での最初の教育経験や親友・佐野利器の助言があったであろうことは想像に難くない。

ともかく關の強い要望に対して文部省は「経費の増額を願わざる条件の下に更に建築科を之に加える事に改められた」と受け入れたことから、この福井の地で日本海地域の高等教育機関では(昭和40年まで)唯一の「建築科」の設置が決まった。そして以下の学科構成・定員となった(3P)。

開校時の学科構成	
(3年制：1学年の定員100名)	
建築科	35名
機械科	30名
繊維工業科	35名
(紡織分科25名+色染分科10名)	

第1回入学試験は大正13年3月に実施され、定員100名に対して入学志願者229名の出願があり、入試結果から定員より5名減の95名の入学が許可された。その各科内訳として志願者と合格者を比較すると、建築科81名に対し35名、機械科79名に対し30名、紡織分科51名に対し20名、色染分科18名に対し10名であった。そして入学許可された95名の入学式は、4月10日に挙行され、3年間の学生生活が始まったのである。この開校に当たり、關校長は「新設の学校はすべからず旧套を脱し、新生面をひらき、福井高工流を發揮していく」ことを所信とした。

開校から3年目の大正15年10月1日、3学年が揃ってキャンパスは活気づき、教室・実習工場等の校舎整備が充実化したことから、文部大臣を始め多くの来賓を迎えて「開校式」が厳粛に挙行され、ここに關校長は式辞で自らの教育観を力説した(4P)。その言葉に拠れば、「工業教育の立場」から「学生に卒業迄には実務に服する相当の自信を持たせる」ために「各科の付属実習工場」で「機械の取り扱いばか



開校時の關 盛治 (45歳)



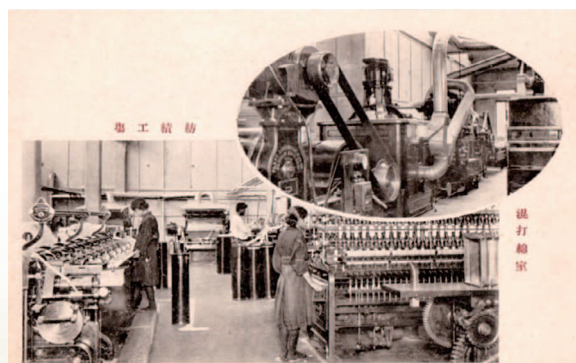
福井高等工業学校 正門と本館



学生の帽章



建築科・製図室(左)と機械科・工場(右)



繊維工業科・紡績工場

りでなく、工場管理までも」修得させることを目標とし、専門の技術力とともにマネジメント力を重視していた。そしてこの教育実践には「学生は単に機械的に注入せられたる知識の容器であってはならず」「学生の自覚を促し、大局に処するの途を与える」ため、学生に「感化啓発を以て」接し、「親愛の情を熱誠の力に寄せて進まねばならぬ所に教育の真諦も又妙味もある」と述べた。さらに学生が社会で活躍する上で「高潔な人格」「強靱な体力」を身に付けさせること、つまり技術者モラルと健康体の育成も教育方針の一つとして加えていたのである(5～8P)。

このような關校長にみる教育者としての熱誠の信念は、「校歌」の1番に「建築」と2番に「機械」、3番に「繊維」それぞれの歌詞の中に、つまり「鉄筋」の如き知力と体力、「熔鋸炉」の如き熱意、「生絹」の如き純粋な人格、という意味の言葉で象徴化された。そして關校長と各科教員たちが「福井高工流」の学風づくりに日々取り組んだのであろう。また關が理想とした熱誠人は、先に紹介した実業界の豊田佐吉のほか教育界の森外三郎である(74P)。因みにこの数学者の森は、第三高等学校長として湯川秀樹や朝永振一郎、西堀栄三郎らを感じ育成したことで広く知られている。

4 關盛治が遺したものを如何に受け継ぐか

こうして關盛治校長によって福井高等工業学校の礎が築かれたのであり、開校とともに編集刊行された校友会誌名に贈った「北冥」の言葉こそ、關が学生たちの将来に向けた遺したメッセージであった。



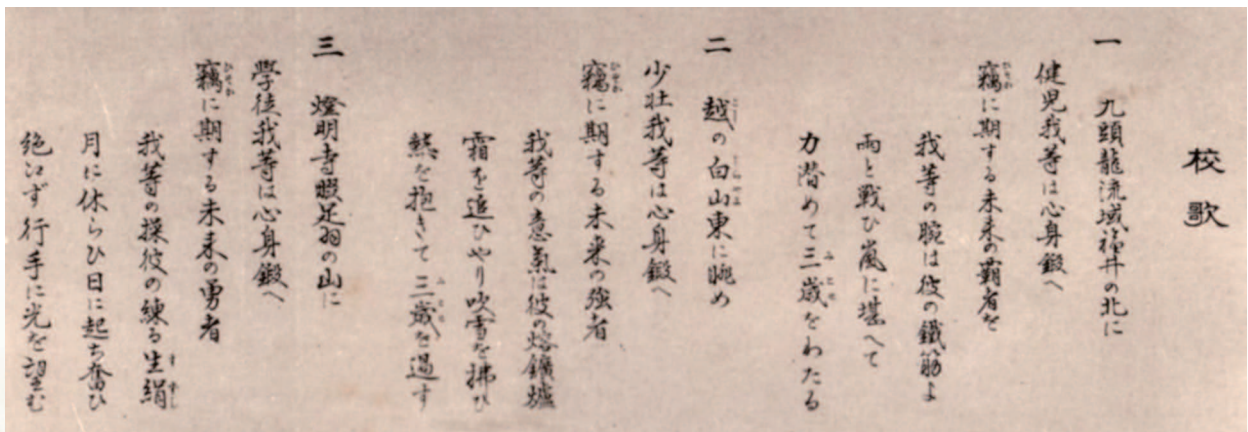
森外三郎
(1865～1936)



校友会誌「北冥」6号
(昭和3年)

莊子の「逍遙遊」を典拠とし、北の海を意味する北冥に日本海沿岸の福井の地を重ねて、この漢詩で詠われたように、この北の学び舎にはいつか幾千里の大魚となる若人が熱誠をもって集い、時が将来して大魚に成長した若人は大空を覆うごとく大鳥に変じて社会へ悠々と飛び立ってほしい、と願った關の静かで熱い思いが込められている。

熱誠人として奮闘した關は、たびたびの持病の慢性腎臓炎で退職の意思を示したところ、学生や教職



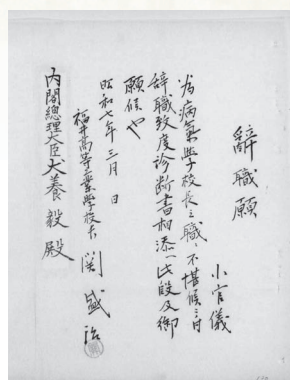
校歌(歌詞に込められた「1 建築：鉄筋」「2 機械：熔鋸炉」「3 繊維：生絹」)

員の根強い懇願から1年1年と引き延ばされてきたが、開校以来8年に及ぶ長い重責の校長職をついに辞する時を迎え、昭和7年3月に關は「辞職願」を文部省へ提出し、5月には正式に内閣総理大臣が受理した。これを受けて關は、忘れがたい福井の地を離れたのである(52P)。

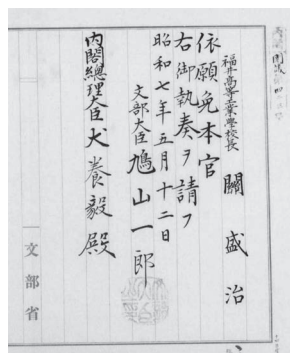
退職後の關は、住まいを東京に移して大正製麻株式会社社長の社長に就いた。半年後の9月17日に2代校長・前田復三の招聘から關は学校を再び訪れ、講堂にて最後の講演を行った。「自己の最善を尽す事、さすれば自分で測り知る事の出来ない力が湧いて来る事は私の体験であります。」(62P)と変わらぬ熱誠で、温かい眼差しを学生たちに向けて語り続けた。されどこの1年後の昭和8年11月22日に關盛治は、56歳の生涯を終えた。そしていま墓碑は、東京都の多磨霊園13区にある。

關盛治の一周忌となる昭和9(1934)年は、福井高等工業学校の創立10周年記念にもなることから前田校長は、学校に残された關の講演原稿等を編集し、その熱誠のこころを受け継ぐべく哀悼をもって遺著『工業教育一家言』の刊行とともに、「胸像」を建設した。それから80年の時が流れ、平成26(2014)年に福井大学工学部創立90周年記念出版として、この遺著が再刊され、さらに戦時期に失われた胸像も再建され、いっそう確かに受け継がれる好機を得た。そして創立100周年を迎えようとする現在、熱誠人・關盛治の遺したものから何を学び、何を受

け取り、さらに次代へ如何に受け継ぐのか、それは今を生きるわれわれ一人一人の自覚と責任にあると考えなければならないのである。



關盛治自筆「辞職願」
(昭和7年3月)



内閣総理大臣・犬養毅へ提出した文部大臣・鳩山一郎の「關盛治・依願免本官」(昭和7年5月)



遺著『工業教育一家言』
(昭和9年)平成26年再刊



關盛治先生像(昭和9年)平成26年再建



退職直後、晩年の關盛治
55歳